

彼女はその一発で終わらせる【完結】

畠渚

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは指揮官とKar98kの終わりの始まり

pixivにも同名で連載しています

目

次

前編
彼女たちの始まり
中編
彼女たちの約束
後編
彼女たちの結末

12 7 1

前編 彼女たちの始まり

コンコンコンコン

部屋の扉を4回ノックする音が廊下に響く。「どうぞ」と気の抜けた返事がすぐに帰ってきた。

少女は少し顔をこわばらせながらも、落ち着いて重苦しい扉を開いて、礼をする。

「失礼しますわ。モーゼルK a r 9 8 k、貴方の指揮下に加わります」「おお、あなたが新しく配属された人形? 私がこここの指揮官よ、よろしく!」

K a rに手を差し伸べてきたのは、スーツに身を包んだ若い女性だつた。疲れや独特の雰囲気もない。K a rがこの指揮官を新人だと断定するには十分だつた。

「ええ、よろしくお願ひいたしますわ、指揮官さん」

少し安堵したような笑顔を浮かべながら、K a rはその手を握り返した。

指揮官は握手をする手を離してからも、K a rの顔を見つめていた。

「……? 何かわたくしの顔についていますの?」

「えついや、何でもないよ」

首を傾げてそう問うK a rに対し、指揮官は少し照れた様子を見せながら目を逸らす。K a rは少しつくれながら、指揮官の顔を覗き込む。

「ちゃんと目を見て話してくださいまし」

「い、いやあ可愛いなつて」

「か、かわつ!? 可愛い!? このわたくしが!?」

「気に障つたなら謝るよ、ごめんね」

「まったく、立派な淑女であるわたくしを可愛いなんて言葉で表現するなんて失礼ですわ! もつとこう美しいとか完成されてるだとかそういう言つた言葉で……」

腕を組んで頬を膨らますK a rを見て、指揮官はクスクスと笑い始

める。

「いやほんと、可愛いなあ」

「だから可愛いって言わないでくださいまし！」

「はははつ！ごめんごめん」

平謝りする指揮官に淑女に対する扱いを指導するK a rという姿が、この基地で見られるようになつた最初の日であった。

====

銃撃音と爆発音が断続的に聞こえる。ここは戦場だ。

K a rは自分の持つK a r98kを抱く。彼女にとつて初出撃であるこの戦闘は、苦戦のくの字もないような戦場だった。

『K a rちゃん、元気？』

唐突に、指揮官の声が無線から聞こえる。

「指揮官さん、ちゃん付けはやめてくださいと何度も言つたらわかりますの？」

『いやー、これが呼びやすいからさ』

「もう、気をつけてくださいまし。それで、戦場まで何のようですの？」

『ああ、次のポイントを指定したからそこまで移動してね』

「先程からそればかりですわ。どういう意図か説明してくださいまし」

し

『うーん……。口で言つてもわからないだろうから、無事に帰つてきちんと見せてあげる』

『わたくし、しっかりと戦術の勉強はしておりますのよ？』

『それでもだよ。ほら、急いで！』

一度ため息をついてから、K a rは移動を開始する。動かし方に疑問は残つても、それが接敵させないための指示であることはK a rにも理解できていた。

「少しは戦術人形であるわたくしを信頼してほしいですわ」

K a rは少し不満だつた。確かに初任務ではあるが、彼女もれつき

とした戦術人形である。

『K a r、不満?』

「あら、聞いていらしたの?」

『まあね。それじゃあ……初戦闘と行こうか』

指揮官から次の座標が送られてくる。

その座標は、ある廃墟の二階だつた。

『あと3分……いや、2分30秒でそこから見える大通りを敵が通る。

一発撃つたらすぐにここに移動してね』

「一発撃つて終わり? 随分と甘い指揮官ですね」

新たな座標とともに、「頑張つてね」と激励の言葉が送られてくる。

『一発撃つて終わり? 随分と甘い指揮官ですね』

K a rはスコープを覗き込んでその瞬間を待つ。距離は有効射程内。人形である彼女には、外すはずのない距離だつた。

心の中で150秒を数え終わつた頃、敵が曲がり角から姿を現す。その数は小隊規模、ダミーもなしに単独行動しているK a rには荷が重かつた。

K a rは一度深呼吸をしてから、スコープで狙いを定める。十字線が向いているのは小隊の中央にいる人形だ。

「許されたのは一発のみ……ならばその一発で最大の戦果をあげてみせますわ」

引き金が引かれ、撃針が信管を撃つ。発射された弾丸はまっすぐと、無警戒の鉄血人形の左足へと突き刺さる。

『完璧ですわ』

余裕の笑みを浮かべながら、K a rは荷物を纏めて廃墟から去る。そこには一つの空薬莢だけが残つた。

「本当にここでいいのかしら?」

次に指定されたポイントは路地裏だつた。ゴミ箱の陰に座り込んで、緊張した身体を休める。

『K a r、お疲れ様』

「指揮官さん。わたくしはこのあとどうすれば?」

『6分ちょうどたつたらそこからすぐの本通りを南に移動して。その

先を回収地点にするから』

「わかりました、6分ですわね?」

『うん、あと5分48秒』

「随分と細かい人ですね。精確だというのは褒めるべきでしようけれど」

『ほら、使つた一発分ちゃんと再装填して備えて』

「言われずともわかっていますわ』

弾を込めて、水分を補給する。身体のコンディションは万全とも言えた。

「そろそろですわね』

心の中で6分を数え終わり、路地裏から本通りを覗き込む。

「指揮官さん、聞こえてますの?』

『ん、どうかした?』

「敵が見えますわ。リッパーが5体ですわ』

『ちょっと待つてね……』

5秒程なにかを操作して、指揮官は言葉を続ける。

『確認したよ。そのあたりには5体だけみたい。K a r、やれる?』

「もちろんですわ』

K a rはセーフティーリード解除する。替えの弾薬を取り出しやすい位置へと入れて、無駄な荷物を地面へと置く。

『それじゃあ、いつておいで』

『さあ……わたくしの力、見せてあげますわ』

通りへと飛び出し、頭へと弾丸をねじ込む。素早くボルトを引き、足を撃ち抜いてもう1体を地に這いつくばらせる。

「あらあら、その程度ですか?』

残りの3体が銃を向けてくるが、K a rは素早く路上の車へと身を隠す。ボルトを引けば、カラント空薬莢が地面へと落ちる。

「覚悟なさつて』

銃を向ける3体のうちの1体を、レティクルが捉える。放たれた弾丸は寸分違わず、その1体の目を貫き脳を破壊した。破壊された人形が無事な方の敵へと倒れ、その敵も動きがとまる。

すかさず装填し、頭を撃ち抜いた。

「あらあら……」

無事な残りの1体は、背中を向けていた。確かに有効射程から離れば多少は生存確率が上がるだろう。なにしろこつちはK a rが1体、驚異としてはそこまででもない。

「愚か者、わたくしたちの技術は世界一ですよ」

K a rは落ち着いてボルトを引き、元の位置に戻す。その動作はやけにゆっくりだつた。それは誰が見ても、余裕の現れだつた。

ターンと音が響き、少し遅れてから力を失つた鉄血兵が地面へと伏す。コアを完全に撃ち抜かれており、完全に停止してしまつてゐる。

「ふう、あとは」

弾薬クリップを取り出し、音を立てながら装填する。

「これで終わりですわね」

足を撃ち抜いた人形へと近寄り、頭を撃ち抜いた。当たりどころが悪かつたのかしばらく動き続けていたが、しばらくするとうんともすんとも言わなくなつた。

「指揮官さん、終わりましたわ」

『うん、お疲れさま。そのまま北へと進んで皆と合流してね』

「わかりました、北へ進みますわ』

無線を終了してK a rは土埃をはらう。身だしなみを整えてから、北へと進み始めた。

|| * || * || * || * ||

「モーゼルK a r 9 8 k、ただいま戻りました」

「うん、改めてお疲れ様」

帰投後、K a rは指揮官のいる部屋へとまっすぐにに向かつた。

「それで、先程の戦役の意図を聞かせていただけるのかしら?」

「ああ、そういう話だつたね。じゃあさつきの戦役のリプレイを見ようか」

そういつて指揮官は端末を操作する。すると机に、先程までK a r

がいた付近の地図が表示された。

「それじゃあ再生するね」

指揮官が再生ボタンにふれると、白い点がいくつかマップ上に表示された。

「これは味方の位置ですか？」

「うん、正解」

「だとすると……これがわたくしですね」

K a rが指差したのは、他の白い点からは少し離れた一つの点だった。

「大正解。さすがだね」

「あなどらないでくださいまし。わたくしも立派な戦術人形ですよ」

「うん、そうみたいだね」

白い点に続き、ポツポツと赤い点が見える。それが敵であることを理解するのに、それほど時間はかからなかつた。

「この動き……指揮官さんは未来でも見えますのか？」

白い点は、それぞれバラバラに動く。そして確実に敵の息の根を止める。そこに無駄は一切見られない。すべてが最初から計算され尽くしたかのように指示されている。

「これは……どういうことですの？」

戦役終了間際、K a rを表す点の前に5個の赤い点がある。それは記憶通りだつた。しかし、その赤い点を囲むように、すべての白い点がその周りに集結している。

「わたくしの実力を試したのですね……」

「当たり前でしょう？ 私は大事な新人人形を1人で突っ込ませたりしないよ」

「さすが、だと言つておきますわ」

「お褒めに預かり光榮です、なんてね」

アハハと陽気に笑つてみせる指揮官を、K a rは見つめる。指揮官がどこまで見えているのか、すごく興味が湧いたのであつた。

中編 彼女たちの約束

カラーンカラーン

扉に備え付けられたベルが鳴る。K a rが扉の方へと目を向けると、そこにいたのは指揮官だつた。

「あれ？ K a rちゃんも朝ごはん？」

「おはようございます、指揮官さん。ちゃん付けはよしてくださいさる？」

「しようがないじやん、だつてこんなにかわいいんだもの！」

ムスツと膨れているK a rの頬を、指揮官はぷにぷにと指でつつく。

「もう、指揮官さんつたら」

「隣、座るね。春田さん、いつものお願ひ」

しばらくすれば、指揮官の前には豪勢な朝食がならぶ。

「K a rちゃんはそれだけ？」

「わたくしはそこまで栄養が必要でないもの」

「へえー。私はこれくらい食べないと無理だなあ」

指揮官の前に並んでいる朝食はみるみるうちに無くなつていく。この基地ではいつも見られる、朝のカフェの光景である。

「それで、わたくしになにか用かしら？」

「うん？いや、何もないけど？」

「そう、それならわたくしはお先に失礼しますわ」

そう言つてたちあがるK a rの袖を、指揮官が掴んだ。

「まあまあ、そんな焦る用事もないでしよう？ ゆっくりしていきなつて」

そういつて指揮官はコーヒーを二杯注文する。スプリングフイールドが苦労してそろえた天然物のコーヒーだ。

ミルで粉を挽き始めると、コーヒーの香りが辺りに充満する。化合物まみれのコーヒーとの大きな違いだ。

「K a rちゃんはコーヒーは好き？」

「ええ、嫌いじやありませんわ」

「なら奮発したかいがあつた」

そういうながら、指揮官は安心したかのよう二ツコリと笑う。たかがコーヒーだが、現在はその価値は跳ね上がっている。いまや合成コーヒーが主流で、それこそ天然物を頼むのはなかなかの勇気が必要な値段になっているからだ。K a rも、普段は天然物ではなく合成品を飲む程度だった。

2人の前に置かれたコーヒーは、やけに透き通つて見えた。一口飲めば、独特的の酸味がスッと喉に通る。調整されていない苦味が、そのコーヒーの価値を示しているようだつた。

「おいしい……」

「でしよう？ 私も久々だよ。やつぱりコーヒーは天然物に限るね」「人間が好んで飲むのも納得ですわ。合成の物とここまで味に差があるとは……」

「そりや、昔はコーヒー豆で商売が成り立つてたくらいだからね」「興味が湧いてきましたわ、今度調べてみようかしら」

「私の部屋に何冊かそういう本があるよ」

軽くそう言つたつもりだつたが、意外なことにK a rは指揮官に詰め寄つた。

「そうなのですか？ でしたら今度、伺わせていただけませんか？」

「えつ……うんいいけど」

「本当！？ ありがとうございます、指揮官さん」

K a rは指揮官に笑いかける。指揮官はコーヒーを飲む手を止めて、少し顔を見開いてK a rの方を見た。

「……ん？ わたくしの顔になにか？」

「い、いや！ なんでもないよ。ただかわいいなつて」

「かわいいではなくもつと別の言葉で褒められませんの！」

「いやあ無理かな。だつてこんなにかわいいもの」

コーヒーを置いて頭をなでてくる指揮官に、K a rは目で抗議する。

「ああもう、髪形が崩れてしまうでしょう？」

「あとで私がなおしてあげるから」

「結構ですか」

K a rはきびすを返して帽子を頭にのせると、そのままカフエから出ていってしまった。

「あらう、振られちゃつた」

指揮官は席に座り直すと、コーヒーのおかわりを注文する。

「さすがに嫌われちゃつたかな？」

イタズラをした子供のように笑う指揮官に、スプリングフィールドは肩をすくめてみせた。

|| * || * || * || * ||

「ねえごめんって」

「知りません！」

「ねえ、悪かつたから、謝るからさ」

手を合わせて頭を下げる指揮官に対し、K a rは腕を組んであからさまに怒つてますアピールをする。

「なんでもするからさ！そ、そうだ明日は朝ごはん一緒にメニューを食べよう？お金は私が出すから！」

「そんなもので私が許すとでも思つてているのですか!?」

「でもおいしいよ？」

「当たり前でしょ？スプリングフィールドさんのカフエですもの」「まあ春田さんの料理でおいしくないものはないよねえ」

指揮官は食べたものを思い浮かべているのか、視線が斜め上を向いている。頬が緩みきつているのが、その味のなによりの証拠だ。

「で、どう？朝食一回分で妥協しない？」

「私がそんな安い女に見えますか？」

「じゃあ食後に天然物のコーヒーもつけるからさ！」

この場を去ろうとしたK a rの足が止まる。

「ダメ？ならバームクーヘンも追加で！」

クルッと指揮官の方へと振り返る。

「今日はそれで許すことになります。次回はないですからね！」

「へつ、チヨロいな」

「ん？なにか言いましたか、指揮官さん？」

「ううん、ナンデモナイヨー」

わざとらしく目をそらす指揮官を見て、K a rは大きくため息をついた。

「まあ、明日の朝に期待していますわ。それでは」

マントを翻して廊下を歩いていくK a rを、指揮官は笑顔で手を振りながら見送った。

曲がり角を曲がって見えなくなつたあと、ポケットから財布を取り出す。

「次の給料日までは節制生活かなあ……」

開いた財布をさつと閉じて、困つたように頬をかいだ。

|| * || * || * || * ||

「わたくしも出撃ですか？」

宿舎から呼び戻されたK a rは、少し困つた顔をしていた。今日は出撃の予定はなかつたはずであり、K a rもその気でいた。少しきつろいでいたくらいだ。

だと言うのに、目の前に立つ指揮官はゴメーンと手を合わせて平謝りしてきている。

「今日は出撃の予定はなかつたはずでは？」
「急に欠員が出ちゃつてさ？」

「突然ですか？」

「うん、ちょっと銃が暴発してね……」

「ま、まさか指揮官さんが壊したんですか？」

「え、えへへ……ちょっと弄つてたら……」

「もう！けがはありませんでしたか！銃は危険ですから気をつけてとあれほど言つたでしよう！」

「ごめんごめん！ほら、この通りちょっとやけどしただけだよ」

そう言つて指揮官は指先を見せてくる。確かに赤くなつているが、

数日ほど放つておけば治るくらいの軽度だつた。

「……ちゃんと冷やしましたか？」

「うん、医務室に行つて処置してもらつたよ。ちょっとヒリヒリするけど、それだけ」

「ならないのですけど」

Karは目を手元の資料に戻す。普段の哨戒となんら変わらない内容である。頭に記憶しているものと照合しながら新しい情報をインプットし、資料を指揮官に返した。

「いつも通りの哨戒で構いませんのね？」

「うん、急で悪いけど頼んだよ」

「まったく、明日の朝ご飯だけでは気が済みませんわ」

「えーっとそれじゃあお昼も……」

「フフフ、冗談ですよ。明日の朝、楽しみにしていますね」

指揮官は鳩が豆鉄砲を食つたような顔をしたあと、フツと笑いかける。

「なんだ、Karちゃんも楽しみなんじやん。かわいいなあ」

「だからかわいいはというのはやめてください！」

「ああ、ごめん。さて、行つてらっしゃい」

「はあ、帰つてきたら覚えておいてくださいよ」

後編 彼女たちの結末

「指揮官さん！状況は!?」

「K a rちゃん！無事！」

「このくらいで死んだりしませんわ！」

K a rは急いで弾丸を取り出し、銃に込める。

「ダミーは3体……味方も行方不明ですか……」

「K a rちゃん、いつたい何があつたの!?すごい音が聞こえたけど」

「ビルの崩壊ですわ。画像を送りましょうか?」

「いや、いいよ。すぐに支援部隊を送るからその場で待機していて」

「私もそうしたいのは山々なのですが……」

音を立ててボルトを戻し、弾を装填する。

「わたくし今、敵に囮まれていますの」

瓦礫から飛び出すと、ダミーを盾にしながら、確実に敵の頭を撃ち抜いていく。5発で5体を倒しきり、再び瓦礫へと身を隠す。

「……この通りに敵？ということは……さいあく」

「何がですか？」

「いや、K a rちゃんは気にしないで。それより今は生き延びて」

「それはなかなかに難しいですわね」

K a rはポケットに手をつつこみ、残りの弾薬を取り出す。銃に詰め込んだ後、最後に残った一発を口に咥える。

瓦礫に対する一斉斉射が鳴り止まぬうちに、飛び出す。弾が頭をかすめ、肩を貫き、足の関節を碎く。しかし、足を止めずに打ち返す。

一発の弾丸は敵のM Fの頭蓋を粉碎する。ダミーをも纏めて行動不能にする。

一発の弾丸は敵の近くの車へと突き刺さる。ガソリンタンクを撃ち抜いたそれは、爆発を引き起こし、少ない数の鉄血兵が足止めをくらう。

一発の弾丸は二体の頭を撃ち抜いた。柔らかい部分をしつかりと貫通し、中身にも大きなダメージを与える。

一発は敵のコアを撃ち抜いた。コアを撃ち抜かれた人形は、引き金を引いたままの銃であたりの人形たちに損傷を与えるながら、事切れた。

一発はK a rからまっすぐと飛んでいく。そしてその弾は、敵の擊つ弾とぶつかってその軌道をそらす。その軌道がそれたおかげで、K a rは致命傷をくらわずに済んだ。

「K a rちゃん！あと1分30秒で到着するよ！」

K a rは口に加えていたラスト一発を装填する。

「指揮官さん、いますぐその部隊を撤退させてくださいな」「K a rちゃん……？」

「この敵の数では無意味です。撤退させてください」

一度、銃撃が止む。先程まで騒がしかった戦場がまるで嘘のようだ。

「それじゃK a rちゃんが！」

「わたくしはここで死んでもそつちで生き返れますわ」

「でも！バックアップは完璧じやないんだよ！」

「たつた数日分くらい、すぐに取り戻せますわ」

K a rの足にコロンと何かがあたる。それが手榴弾であることがすぐにわかった。今はなき味方の置き土産だった。

「どうやら神様は私を見捨てていないみたいですね」

「待つて！K a rちゃん！」

「指揮官さん。明日の朝食、楽しみにしていますわ」「ダミーが指示通りに動き始める。

「待つて！待ちなさい！K a r！」

「それでは、おやすみなさい。指揮官さん」

K a rが前に踏み出すと同時に、敵の銃撃が再開する。ダミーに風穴を空けながら、K a rは前へと進む。一体、また一体とダミーが倒れていく。残りの一体も盾としてすら使えないほど穴が開いても、K a rは進み続ける。

「せめてこの一矢だけでも……！」

手に持った手榴弾を空に投げ、サイトを覗き込む。

ターンというK a r 9 8 kの銃声は、手榴弾の爆発音がかき消してしまった。特注に強化されたそれは、勢いよく破片を撒き散らす。

破片は周囲の人形につきささり、決して浅くはない傷をつくる。

爆風でK a rの帽子が後方へと吹き飛んだ。

「K a rちゃん！ いま爆発音が聞こえただけどどうしたの！」

「あら、指揮官さん。通信は切つておいたほうが良いと思いますよ」

「何を言つて——」

指揮官の声は、銃声でかき消された。通信機には、銃声の他になにか鈍い音が混じっている。

それがK a rの身体が弾丸に壊されていく音と気づいたのは、銃声が止んだ後だ。

「ねえ、K a r？ 返事をしてよ」

その声が戦場に届くことはない。指揮官の見ているモニターには、切断という二文字が表示されているだけだった。

==*==*==*==*

「おはようございます、指揮官さん」

「おはよう、K a rちゃん」

「はあ、ちやん付けはやめてくれませんか？」

「無理かなあ」

そういうと指揮官はおもむろにK a rに抱きつく。

「どうかしましたか」

「おかげり、K a rちゃん」

「ただいまです、指揮官さん」

グリグリと頭を擦り付けてくる指揮官を、K a rはそつと撫でる。

「どうやらわたくし、戦場で死んでしまったみたいですね。ご心配をおかけしました」

「心配どころじゃないよ……ごめん、私があのルートを指示しなかつたら」

「それ以上は言わないでください。わたくしがもつと強ければよかつ

ただけの話ですから」

「そんなことない！K arちゃんは……十分強かつたよ。おかげで後方の部隊は無傷で帰れたんだよ？」

「そう……ですか。お役に立てたようで何よりですわ」

「……バカ」

弱々しく、K arの胸をたたいた。

「そうですね、よかつたら朝食でも一緒にしませんか？スプリングフィールドさんのカフェに行きましょう」

K arはそう言つてなぐさめる。なぐさめようとした。指揮官がよくカフェに行つていることは覚えていたから、自然とそういう言葉が出た。

「そうか、覚えてないんだ……」

「ちよつと、指揮官さん!?」

指揮官はK arから離れると、そつとベッドへと戻る。その姿はどこか、病人のように見えた。

「いや、なんでもないよ。春田さんのカフェね。支度をしたらすぐに行くから先に行つてくれる？」

「わ、わかりましたわ。それではまたあとで」

そう言つてK arは指揮官の部屋から出る。しばらく扉の前に立つていれば、すすり泣く声が聞こえてきた。

「いつたい何がありましたの……」

それを確かめる術を、K arは持つていない。バックアップをとつていない間の出来事を記憶することは、不可能だつた。

＝＊＝＊＝＊＝＊＝

「K arちゃんはいつも通りなんだね」

「戦術人形たるもの、時間は有意義に使いませんと」

そういうながら、K arはいつもどおりの少ない食事を済ませる。

「それではお先に失礼いたしますわ」

「まあ待つてよK arちゃん」

指揮官の制止に、今回は動きを止める。

「何か？」

「まさか、あの約束は忘れてないよね？」

「あの約束？」

「……私の部屋に来るんでしょう？」

「そ、そうでしたわ」

コーヒーカップで口元の隠れた指揮官に、K a rはそう慌てて返す。

「いつ伺えればよろしいですか？」

「そうだな……じゃあ今夜で」

「わかりましたわ」

それだけ言うと、K a rはカフェを出ていつてしまつた。指揮官はコーヒーカップを置き、席を立ち上がる。

「ごめん春田さん。残りは他の子に自由に食べさせておいて」

そのままカフェを出ようとする指揮官に、スプリングフィールドが慌てて近づき一束の花を渡す。

「これは……カモミール？ ありがとう、春田さん」

少し指揮官の表情が和らいだのを見て、スプリングフィールドはほっとため息をついた。

==*==*==*==*

「ようこそK a rちゃん、私の部屋へ」

「指揮官さん、わたくし毎日起こしにここにきていますよ」

「あはは、そうだつたね。まあまあ、さあ帽子とマントは脱いでさ、くつろいでよ」

といいつつも、狭い室内で座れるところなどベッドの上しかない。

帽子とマントをハンガーにかけて、指揮官の隣へと座る。

「ねえ、緊張してる？」

「あの……？ 指揮官さん？」

「……じゃあまずは上から脱いで？」

そう言つて指揮官はK a rの腰に手をやる。抵抗をする間もなく、

ベルトを取られた。

「し、指揮官さん？これが約束ですの？」

「……そうだよ？ Karちゃんから言い出したんじやん」

指揮官は少しムスッと怒るフリをしながら、ボタンに手をかける。
ここまでしても、Karは抵抗という抵抗を見せなかつた。

「ねえ……どうして？」

「何がですか？」

「どうして、怒つてくれないの？どうして止めてくれないの？違う
！って言つてくれないの？ねえ、戻つてよ……昨日のKarちゃんに
戻つてよ……」

「指揮官さん……」

そのまま腰にしがみつくように、指揮官はKarに抱きつく。その
目元が濡れていることは、見るまでもなく分かつた。

「ごめんなさい。わたくしのせいですね」

指揮官はポコポコとKarの胸をたたく。そして嗚咽を隠すよう
に、Karのおなかに顔をうずめる。

「昨日のわたくしが何を約束したか、教えてはくれませんか？」

指揮官は顔を隠したまま首を横にふる。

「まったく、手間のかかる人ですね」

Karはそつと頭を撫でる。いつもは手入れされている髪の毛も、
元気がないように思えた。

しばらく、そのまま時間が流れた。

しばらく時が経つと、寝息が聞こえ始める。Karは指揮官をベッ
ドに寝かせなおすと、ぐるりと部屋を見回す。本棚とベッドと、それ
からベッド横に小さい棚があるだけだった。

Karは本棚へと歩く。そこにはたくさんの種類の本が整頓され
て並んでいた。その中でも、コーヒーについての本はKarの目を引
いた。

「ん……Karちゃん……」

指揮官がそう寝言を漏らした。K a rはベッドの方へと戻る。戻つて気がつく。指揮官の側にいくと、その手になにかを握りしめる。

それはボロボロになつたK a rの帽子だつた。

ふと入り口へと振り返る。そこには、先程まで被つていた帽子がかかつてゐる。つまりは、この帽子は昨日のK a rが戦場で落としてきたもののはずだ。

枕元に座り込んで、その帽子に手を触れる。十字の飾りが、キラリと光つた。

「ああ、そういうことですか」

K a rは立ち上がりつて、指揮官の端末に手を伸ばす。

「おやすみなさい、指揮官さん。明日の朝食、楽しみにしていますわ」立ち上がつたカメラのアプリは、帽子を握りしめて寝る指揮官の寝顔をバツチリと捉えた。